

高校当該学科教官の意見の公私混同もあつたらしく、半年近くも暗礁に乗り上げた。私も奔命に疲れて夜も眠られず、ノイローゼ→自殺とはこのような経過の末かと実感を持ったほどである。幸い桜井教頭や2学部長の尽力で当初の念願が達成でき、今、高校は順風に乗っている。

その2は農場問題である。現在萩山にある農場の大部分は西武鉄道から借用しているもので、期限が切れてから約10年になる。しかし先方も気を遣って52年春には代替地として狭山丘陵の東端にある北山地区で現面積の数倍もある土地を無償で提供すると言つて来た。現地を見ると茶畑や水田あとで、整備や建築の要はあるがまことによい環境であり、時間も今と大差ないので、高校は交換に一致した。ところが社会にある農業軽視の風潮が災してか、先々の労を厭つてか、大学の保守的な一連の管理職や事務官らはことごとく整備・維持・財源の困難を他の付属に並べ立て、ついに1:3になつて、その秋、我々は涙を呑んだ。こうして農場は元の26,000㎡から今や住宅に囲まれた国有地と生和会の7,600㎡、つまり29%に縮まって、ままごと農場になり下つた。私の非力を自責する一方、これが輝かしいお茶大の悠久の歴史に、大きな汚点となるのではないかと惧れている。

にもかくにも私の情熱をかき立ててくれた、敬愛する高校の発展を願つて、4年に亘る本稿を閉じたい。思えば私に勤まるか知らと長く感じた時もあつた一方、残した仕事にもう任期かとも思う。

## 水を求めて

浅海重夫

北海道の僻地で生活用水を採求する仕事に加わってから2年目になる。一昨年に留萌の北東20km、小平薬川沿岸の小区域に、心身障害者の更生のための生活施設を作る計画が始められた。建物の工事が進むうちに、そこが水の得にくい土地であることがわかった。付近の農家のように浅い井戸を掘ればよいと考えていたのが間違ひだった。そこで水の採求について相談をうけたので、2.5万円その場所を調べてみてこれは難しい問題だと思った。経費さえかければ日本の中で水の採れない所はないだろうが、資金の豊富な事業ではないので、何とか知恵をしぼれないかという。迷つた挙句この仕事に参加する決心をしたのは、昔かかわつたことのある公的調査事業や研究費がとれる委託事業ではなく、上述のような目的の施設であることと共に、この事業の推進者の人柄と熱意に応えたいと思つたことによる。その上もうひとつの動機が加わつた。それは、これまで自分自身のささやかな研究と学生の実習などにしか使つたことのないエンジン付ボーリングマシンと大地比抵抗電探器とを、生活用水の採求という実際の目的に応用する絶好の機会として把えたことである。この初体験は現地での作業をつうじて手足も心もふるえる感動に満ちたものとなつた。しかし本文はその調査の経過や首尾について記すつもりではない。

問題の小区域は河岸段丘と比高の小さい丘陵にまたがっている。井戸を設けたい地点は丘陵の中腹に当り、付近農家の既設井戸は段丘面上にある。これでは丘陵地で別の地下水脈を探らねばならないが、第三系の泥岩と砂岩からなるこの丘陵地は段丘面以下の水田地帯に幅がせまく半島状に張り出した輪郭をもち、たとえ水脈があつても水量は期待できそうもない。段丘面で鑽井し丘陵中腹までポン

プアップする方法では、揚水高は少くとも15-mを要して苦しく、しかも近年来、農家の井戸の水位が下降気味なので、段丘面に新たに井戸を増やすこと自体が困難と思われる。

ここで何人かの関係者による探水方法の見解を比べてみよう。まず事業の推進責任者Mさんは——専門家の意見を質しながら経費との相談で苦しみつつ、水を出したい、出なければならぬのだと常に情熱的に心に期している。同じ事業の若手担当者でこの施設の直接管理者F君は——やはり専門知識は持たないが強い実行力で調査機器を駆使し、最終的に丘陵内の小沢から水を引くという一応の結論を考えていた。次に段丘面の部落の農夫の1人は——山(丘陵)の裾で井戸を掘れば水は出る、という。一方施設の区域に隣接する水田の所有者は——丘陵から流れ出る沢の出口にもと水田用水の溜池があるが、その土どめの築堤から滲み出る水が案外豊富だからこれを集めて引けばよいとの説。(山裾で井戸を掘るにはこの人の農地を借りなければならない。)次に井戸掘り屋の話——丘陵でも水は出る、現に施設区域内で最近古井戸が発見され、水も溜っていた位だから掘ってみるとよい(この古井戸の水は地表のしぼり水で、恒常的な地下水でないことがボーリングでわかった。)その後留萌から頼んだユンボ掘り(ショベルカー運転者)は——丘陵内の3本の小沢の出口を掘り上げたが湧水はないと、意見も出さない。次に地質・土壌の専門家のはしくれ(つまり筆者)——丘陵内の最大集水面積をもつ沢(但し区域内で最も速いはずれにある)の開口部に小規模の堰堤を作り、導水パイプを引く、凍結期の水量を測定した上で次の春に工事をする。井戸は断念。最後に陸水学者の1人(筆者の知人)は——このような所では水は得られないのが常識、小平薬川から導水するか深井戸を掘るかだが、水利権の問題がからむ。

さて現在は、暫定的に近い小沢から引水しポンプアップを併用して、7~8人が生活できる状態になった。厳寒期に渇水しないか、今後20人程度の生活を支えるにはどの方法をとるべきかが懸案となっている。

## 晩秋の松代

式 正 英

昨年の10月から、私自身の身边がにわか革(あらた)まった。思いがけないことだったが、文教育学部長の重責を負わされることになったからである。勤め始めてから19年目の馴れた大学だから、大した変哲も感じないで済むと思ったのは大ちがいだ。部屋のたゞずまいが変り、事務官達との付き合いが、多くなったばかりではない。中味のまるで異った仕事に追いまくられて、教育、研究が主な仕事だった在来のペースは全く乱されることになった。未だにこの勝手の異った環境とは調和させようにも出来ない思いである。

併しこの様な具合の中で、何とか気分転換の方法を見付けたきっかけは、信州松代への旅行だった。月の変る期間の数日だけが、少しまとまって暇になるチャンスなのである。半年ほど前に気象庁の火山学者の諏訪彰さんが、松代の地震観測所の所長に転任され、「一度来て見ないか」と誘われていたのを思い出して、大学院生ら5人と一緒に訪ねてみることにした。真田氏の城下町だった松代は、駅